

# 親鸞の末法観と『弁正論』

藤原智

## はじめに

親鸞(一一七三～一二六二)の名著『教行信証』「化身土巻」の後半に、唐の法琳(五七二～六四〇)の『弁正論』の長い引用がある。しかし、その意義についてこれまで十分な検討はなされていない。本稿は、『弁正論』引用が、親鸞の末法に関する論述と密接な関係にあることを指摘する。それにより「化身土巻」後半への従来とは異なる視点を提起したい。

### 一 「化身土巻」後半の基調となる末法観

『教行信証』は「化身土巻」の後半(三願転入以降)に至って、論調が大きく変わる。

信知聖道諸教為在世正法而全非像末法滅之時機已失時乖機也、浄土真宗者在世正法像末法滅濁悪群萌斉悲引也(『定親全』一・三〇九～三一〇頁、以下頁数のみ記す)

ここで親鸞は、聖道と浄土真宗を対比させつつ、聖道の教え

は末法の現在においては全くの時機不相応であると断言していく。ここから展開する論述は、『教行信証』の後序と呼ばれる次の文でもって結ばれることになる。

竊以聖道諸教行証久廢浄土真宗証道今盛…(三八〇頁)

そしてそこから語られ出すのが、師法然(一一三三～一二二二)と共に自らも流罪となつた承元元年(一二〇七)の法難である。諸寺の釈門が朝廷に訴えて専修念仏への弾圧が行われたその有り様が、まさに「行証久廢」の露呈だと親鸞は受け止めたのである。「化身土巻」後半の論述は、聖道の教えを伝える諸寺の釈門が「忿を成し怨を結ぶ」(三八〇頁)ことになるその過失の根本がどこにあるのかを指摘するものと言える。その中で、親鸞は「邪偽異執の外教を教誡す」(三二二頁)と「外教邪偽の異執を教誡せば」(三二七頁)という、似て非なる二つの課題を出す。それは二つの別個の事柄でなく、一つの事柄を二つの視点から「教誡」するものと考えられる。

その第一の教誡でのテーマは末法についてである。

拋正真教意披古徳伝説顯開聖道浄土真仮教誡邪偽異執外教勘決如来  
涅槃之時代開示正像末法旨際（三二一頁）

ここでもまず問題となるのは、「教誡」の対象が「聖道」ではなく「外教」だという点である。末法の議論になぜ「外教」が出てくるのか、容易には知り難い。さらに問題は、そのために「如来涅槃の時代を勘決」と述べている点である。これが意味するのは、親鸞の当時の言論空間で、釈尊入滅年代について議論があったということである。

親鸞は、以上の課題の提示に続けて道綽（五六二―六四五）の『安樂集』を引く。正法と像法については、主に正像二千年説と正像千五百年説との二説に代表されるが、『安樂集』は正像千五百年説を取った上で「当今末法にしてこれ五濁悪世なり」（三二二―三三頁）と述べていく。五百年以上前の時代を生きた道綽のこの時代認識を受ける形で、親鸞は釈尊入滅から現在に至るまでの年月を計算する。

案三時教者勘如来般涅槃時代当周第五主穆王五十一年壬申從其壬申  
至我元仁元年甲申二千一百八十三歳也、又依『賢劫経』『仁王経』  
『涅槃』等説已以入末法六百八十三歳也（三二四頁）

ここで釈尊入滅の時代を周の穆王壬申（紀元前九九九）に見定

親鸞の末法観と『弁正論』（藤原）

め、親鸞はそこから自身が生きた元仁元年（一二二四）までの年数を計算する。そして『賢劫経』などの説として正像千五百年説に立つ場合、末法一年目は西暦で言えば五五二年であるため、すでに末法に入つて六八三年（正しくは六七三年）になると結論付けるのである。この親鸞の計算は、さらに続けて引用する『末法灯明記』に依っている。『末法灯明記』は、釈尊入滅の年を「穆王壬申」（紀元前九九九）とする法上の説と「匡壬壬子」（紀元前六〇九）とする費長房の『歴代三寶紀』の説との二説を挙げる。そして道綽と同じく正像千五百年説を取る。この場合、前者の説では西暦五五二年、後者では西暦八九二年に末法に入ることになる。『末法灯明記』は延暦二十年（八〇二）をもつて「既に末法に同ぜり」（三一七頁）と述べ、像法の末であると認識しており、後者の説を採用していることがわかる。ところが親鸞はこの二説のうち、『末法灯明記』に反して前者の説に立つ。それは道綽の「当今末法」という時代認識を根拠に選び取つたのだと言えよう。

## 二 仏滅年代に関する二説と「延暦寺大衆解」

これまでの確かめからすると、親鸞が「如来涅槃の時代を勘決」と述べたのは、『末法灯明記』が提示する二説、詳細に言えば釈尊が周の昭王甲寅に生誕し穆王壬申に入滅したとする「昭穆間在世説」と莊王甲午に生誕し匡壬壬子に入滅

## 親鸞の末法観と『弁正論』(藤原)

したという「莊匡間在世説」のうち、前者に決定するという宣言であったことがわかる。田村円澄<sup>(1)</sup>によれば、この二説は『末法灯明記』だけでなく、平安・鎌倉時代に広く行われていた。末法思想と言えば、平安時代の永承七年(一〇五二)が末法第一年に当たるといのが共通理解であったとされるが、それは「昭穆間在世説」に立ち正像二千年説を取る場合に限られる。そして親鸞の当時、異なる立場を取る者がいた。それが比叡山延暦寺である。建保五年(一二一七)、延暦寺は専修念仏の停止を朝廷に要請する。そこに次の文が見える。

如来出世、聊有衆典不同……尚在像法之終、未入末法之初、既有昭王莊王之両説、難成像法末法之一途(真宗史料刊行会編『大系真宗史料文書記録編一』法藏館、二〇一五、八三頁)

ここから、末法論争で「昭穆間在世説」と「莊匡間在世説」のどちらを取るのかが、延暦寺からの重要な批判の論点だったことが分かる。さらに貞応三年(一二二四)の延暦寺大衆による奏状は、「莊匡間在世説」に立ち、さらに正像二千年説を取ることで、現在がまだ像法であり末法でないと明確に主張していくのである。

如来出世、更有異説、如天台浄名疏等者、以周莊王他之代、為釈尊出世之時、自其代以来、未滿二千年、像法之最中也、不可言末法(同前、八九頁)

この奏状が出された貞応三年は、十一月に改元されて元仁元年となる。すなわち、親鸞が「昭穆間在世説」に立って、仏滅年代計算をする基準とした年であり、宮崎円遵<sup>(2)</sup>の指摘によれば、それはこの延暦寺の奏状に対するものであった。

ところで、この「昭穆間在世説」はどうして注目されるようになったのか。この点について楠山春樹<sup>(3)</sup>は、「昭穆間在世説」を強力に主張したものが法琳の『破邪論』『弁正論』であり、やがて唐代のある時期に「莊匡間在世説」に代わって通説となった、と結論している。この指摘に従うならば、親鸞の「昭穆間在世説」に立って現在を末法だとする論は、第二の教誡に引く『弁正論』との連関が考えられよう。

## 三 仏滅年代論争と『弁正論』引用

『弁正論』は唐代初期における仏教と道教との論争書である。今注目したいのが、『教行信証』での引用の初めにある十喻篇の第四喻と第六喻からの連続する二つの文である。

第四喻(三六二〜三六三頁)が問題にするのは、老子と釈尊の教化の範囲である。そのため、いっどこで生まれ、何をしていたのが問題となる。第六喻(三六三〜三六四頁)の議論は、老子と釈尊のどちらが先に生まれたのかというものである。これは、道教と仏教のどちらがもう片方に影響を与えたのかという、道仏論争での最も重要な点であった。このため

に生没年について議論が交わされることになる。

注目したいのは、この二つの引用に共通する事柄であり、それが釈尊の生没年である。議論は老子と釈迦のどちらが先に生まれたのかに中心があるが、それは直ちに釈尊の生没年についての異論を生むことになる。そしてこの二つの引用は共に釈迦の生没年について、道教側は「莊匡間在世説」を、仏教側は「昭穆間在世説」を主張するものである。

老子と釈尊の先後については、唐代初期の道仏論争で最も重要な議論であった。しかしそれが日本の鎌倉時代を生きる親鸞にとって積極的な意味があるのだろうか。そこで、より重要な意味として考えられるのが、本稿が主題にする末法論争である。すでに見たように、元仁元年について、延暦寺の奏状は「莊匡間在世説」に立って未だ像法だと主張し、親鸞は「昭穆間在世説」に立って既に末法だと反論した。この末法論争における議論と、『弁正論』での道仏先後の議論は、テーマは異なるが内容は同じである。恐らく親鸞は、「莊匡間在世説」に立つ延暦寺に対して、その説は元々は仏教内での説であったが、唐代初期に道教が仏教を貶める為にもちいた主張であり、護法沙門法琳によって否定された説なのだと思ふべようとしているのである。「如来涅槃の時代を勘決」するとき、それを「外教」を教誡することと並べていたのは、この『弁正論』での外(道教)の主張を見据えてのことであった。

親鸞の末法観と『弁正論』(藤原)

## おわりに

本稿は、末法論争を視点に、親鸞の『弁正論』引用が、現に専修念仏に向けられた批判と重なっていることを明らかにした。それが意味するのは、比叡山の批判は「外教」の主張におもねるものであり、「邪偽の異執」だということである。非常に長い『弁正論』引用は、そこにおける道教の仏教批判とそれへの応答が、専修念仏への批判とその応答に重ねられたものとして一貫して見ていく必要があるだろう。

- 1 田村一九五四、六九頁。
- 2 宮崎一九五四、一〇頁。
- 3 楠山一九九二、五九五頁。

## 〈参考文献〉

- 楠山春樹「中国仏教における釈迦生滅の年代」(『道家思想と道教』平河出版社、一九九二、五七九―五九六頁)
- 田村円澄「末法思想の形成」(『史淵』第六十三輯、一九五四、六五―九一頁)
- 宮崎円達「親鸞の立場と『教行信証』の撰述」(慶華文化研究会編『教行信証撰述の研究』百華苑、一九五四、一―三七頁)

〈キーワード〉『教行信証』、化身土、法琳、「延暦寺大衆解」

(親鸞仏教センター研究員・博士(文学))